

さらに投稿数が増え、読み応えがあると同時に選考の難しさも感じました。  
今回はこれまで以上に、なぜこの詩が生まれたのかという問いを通じて、詩を書くことの意味を考えさせられました。

滲む字の

詩集をだれかにあけわたす

買った日よりも増えた重さを

旭日 百（滋賀県）

読み手の感情が溶かし込まれ「滲む字」。「あけわたす」という言葉に、「だれか」に読み継いでほしいという意志が感じられます。読み継がれることで、言葉は深まり、「詩集」は育ってゆく。

太陽を浴びて笑ってる水面を

プールの底からずっと見ている

青野陽（熊本県）

人は重力に引っ張られる肉体を持っているから、魂の飛翔を求めつづけ、そのような心性が詩に向かわせるのかもしれない。

十万字

誰にも見せない小説を

書いて密かに復讐している

サトリ（東京都）

「十万字」の「誰にも見せない小説」。書くことはあらゆる可能性につながると思うので、自分だけが知る「密か」な「復讐」の手段としては、かなり有効な気がします。

本日の牛の識別番号は

一二七三九五三八

はすた（富山県）

国内で飼育される牛に出生の段階でつけられる“個体識別番号”。牛肉のパッケージなどに表示のあるこの番号をインターネットで調べれば、購入した牛肉の生年月日や性別、飼育地などの基本情報が誰でもわかるようになっているそうです。今やわたしたちもマイナンバー

で管理されていますね。人間と人間社会への強烈な風刺ととらえました。

指の影のカケラを  
ひとつひとつ拾ってゆく  
明日を始めるのに  
いい春の夜だ

武中 義人（岡山県）

「影」という実体のないもののさらに「カケラ」という儂いものを「ひとつひとつ拾ってゆく」。そんなよるべないものを拾い集めて、「夜」に「明日を始める」こと。作者の詩をつくるときの心のありようが描かれているように思いました。

季節が一枚  
めくられてゆくよ  
春用の帽子が  
ゆるい雨を受けているよ

武中 義人（岡山県）

空気や道ばたの植物に少しずつ春の気配が伺えるようになってきた散歩中に降りだした「ゆるい雨」。「春用の帽子」だから、生地は薄く、雨を受けてもずっしりと重くなったりはしない。雨を困ったものとしてではなく、春をもたらすものとして、ゆったりとした気持ちで受け止めている。やわらかな語りかけも春のあたたかさを連れてきます。

立春  
エイのひるがえり

藤色（京都府）

巨大なエイが空をひらひらと優雅に泳いでいる様子を思い浮かべました。一羽の大きな鳥が空を占めているマグリットの絵のように。「エイのひるがえり」が生命の意志のように感じられるのは、「立春」という季語の持つ力によるものでしょう。エイがひるがえるから春一番がもたらされるのかもなどと楽しい気持ちになりました。

せたんばるくらばるくもんそ  
木の芽時

奎いう子（佐賀県）

こちら「木の芽時」という季語によって、一行目の不思議な言葉が、木の芽時にふさわしい呪文のように響いてきました。春の精が木々へ芽吹きを促すために唱えているかのような。

そこらじゅう

白いマスクの抜け殻が

溢れてもまだ羽化しない街

湯たんぼ（宮崎県）

道端に落ちているマスクにはつけていた人の気配がなまなましく残っているような気がします。「抜け殻」の言葉に、マスクが打ち捨てられているというより、つけていた人がふっと消えてしまったような感じも受けました。「まだ羽化しない街」に、語り手の抱える閉塞感とともに、突破口を求める気持ちが伝わってきます。

布団の中で乱反射 ブルーライト

外は寒いから

ここから教祖を見つけてみる

つばき柵（山口県）

今はスマートフォンひとつあれば世界とつながることができる。「布団の中」で、自分の人生を大きく左右するものだって見つけようと思えばおそらく見つけられる。波長の短いブルーライトは目の表面で乱反射することがあるそうです。また、夜間に浴びると体内時計に影響を及ぼすとも。「外は寒いから」という理由の軽さ、そしてスマートフォンで見つける「教祖」という手軽さ。現代を生きるわたしたちにさまざまにもたらされる危うさを思います。

傘の骨折りたたむとき血まみれの

獣折るよう手が濡れていく

藤堂游（愛知県）

なまあたたかい夜の雨を想像しました。私自身はこれまで傘を折り畳むときに「血まみれの／獣折るよう」と思ったことはなかったにもかかわらず、心情も伺わせる比喩の確かさによって、その体感がダイレクトに伝わってきて、強く印象に残りました。

でこぼんの

でこの部位へと刃を下ろし

うすくかがやきだす春の午後

さいう（愛知県）

「春の午後」がでこぼんの明るい色と匂いで満たされ「うすくかがやきだす」、切り取られた「でこ」によって。美しく残酷なこの世の成り立ちをも感じさせる作品。

「 」声を攫って花の滝

五味 はこ（神奈川県）

攫われた声、「」の中身は、読み手に委ねられている。どんな声、言葉でもその先の別れを予感してしまうのは、こぼれつづける花のせいだろうか。

取り上げた作品は春の訪れを感じるものが多くなりましたが、他にも心動かされる作品がたくさんありました。

これからも新しい言葉との出会いを楽しみにしています。